



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

文庫 20  
345

宇陀の法師

伊地知氏書冊

説渭撰集法

ま由  
許六 撰



一師說云、蔵集と撰集の有りあるとす。育む、戒集の附  
乗度を許す。之後、空也等が、既に附せられ、もと蔵内  
總治監の、緒とからともやうとする。

一トモその、空也、蔵集をかき、緒とからとも、見削せし所乃  
源三あわた、開口ます。づきかき、もと、

一教もとえずす。むちく、本比教もとく、秀句、至ふる  
一教経傳の、勧集と云ふ。す。世との眼底が、一經

教へ、坐ちてゐておき入へ、一教の事はもく秀忠  
主えりあひゆ様をもらひまと多そも集ひあ  
などやもまきれひるは能達も又曰く庫元達  
揆えもじ先師一代志の圓せんと能達セモと慶  
ゆう能達乃もあ圓せんと能達セモと慶  
な一ゆゑすかの能達ハ古人よりもむづも  
一達をめぐらす事も同じゆゑに甚しきト云ひ也モ  
集ひてつゝ財物をものもあと入て又第一の仕がまびと  
逃走のうすてまくのを取つてまづも

一走はまを駆の内にひくと郵古今勅撰の附はる極後勅  
宣すあり古今をあさりまつていたる年号の事  
トも亦、ととまでわたりてき見え、よし極ともいま  
ゆゑ此一罪くらま事あらんと考へて撰さんと  
下を詠す事ひやるを民の上位はくにせりと集  
ゆすまふ也。」前勅撰の附はる宮あくび  
ハシ御抄本をあくびて是ま今の御造撰集によ  
く不令のなづかむがくよきやね御御製の傳よ  
重あ下の下崩とがくと意代に堪能、不吉と存

里にあめ萬帝の御製と不まへる久丸赤人取  
乃蓬老と入へ一善代をくぬ人燒入よ一二肩手乃  
かよ入へ二代の後事あまくも機も乃何よ半出を  
よづきの内もみ給へとこよとすく角へく人よ  
付よめゆきとてんの字ともすりやせまのひ陽乃殿上  
下あく上をゆよトヤと潤よう教はれ林の歌、陰也上下  
とかつて殿もよ潤よとけじに懐旧床懐乃音土を  
季なまくとまみな不令之在、ゆゑ意思意とつぐむ也  
席伏せ懶ねりもよしも本も名もかほじ集序  
も圓ゆ也かまくアミドリモツメ泡がらよ、さくねぬね

一  
もあつて、かくもすが、集挾が、まことに、道因は門を  
りも早はのむ也。久和すはれん深き、氣が、よれ十八宵  
も入まらず、あひとぞ、かくもとぞ、二宵か  
て大有金もとづきあひ、徳清は、かくも大執事の  
事、はれり入たまつる。

萬物の形造りを人の眼よりの甲に立す。まことに能  
く種々批判を下す。従來見頃と號して其教化例を今

ゆきしより新古今の時ありてひあづまよどくも  
軒機とまで上りきる遠すて也。是は師とまで撰集の  
事なり。不そや批考とて前も後も絶え入り。其れが爲  
まひり更にやと尋ねれば不入り。アリトヨリ。そぞ集  
にて詮うりて又東山の方へ。やあまほひのむ(笑)て  
略を仄はな入じよせよ三々とれり。年はも浦  
内とあらわらひあわわ略を仄すもて入はばよ  
なはる。あら葉す。略を仄の音一首がかなほしきよか  
ぎもよ素てニタを加てせんばく。あ付讃謡の集。おはの  
つき附事也。支医も。お一自ら薬も。つて支医のう  
持ても。もとす。代りよ。今りゆうとてくわ歌と歌とのう。  
をふうふよ。あわせ。儀も。歌も。いのう。歌も。歌のう  
な。で。は。医も。歌も。近代。歌も。も。よ。あ。て。ゆ。よ  
時起も。も。撰集て。よ。遠。へ。を。か。く。ぐ。集。と。ぞ。す。も。  
よ。き。み。を。東。あ。南。か。よ。り。あ。よ。集。は。書。林。よ。か。た  
よ。と。し。ゆ。が。集。ハ。ね。り。ゆ。よ。よ。や。す。ば。き。よ。す。  
ち。逃。去。一。人。の。罪。な。わ

一集ハオ一もくセラモドウテウカノハシメ梅稿日記  
志モトアマニウト並ゲセキムフ興のまセ一徳ミテシテ  
モノアモの遠近也近年ミテ差別ヲ前集篇室  
モジキアキトガモテヤハルアモニ二核ウモ一ム義  
久松トガシカムモニテ、向也ナクテハ代號とも  
シ財アモを加テハアリシケヨアトキアモ前モ歌  
奇約也乃奇モニ先別わば向也の事ニ是カハ歌の事  
乃核式也トシテ向也よゆづニシ核アリ古今集之原  
業辛の奇ア

ほ生の晴日雨やまき日暮の光とあとの洋(キリシ)附  
めまつぞあそびつ年の回すよハソロアカノトシ  
は奇角もさく歴もシトモキ代ハトモ古今集より  
黒代の秋大はよやーとこみくせりとよや清よせれ  
き純ハ留里よゆかて益令とひとあじと  
家ハこれ村トモ繁や墓系 無 は久魂家  
と無ダモ古ト墓系トハヤミ秋矢や向也よ益令とアモ  
ムヒテは既とアモミトア墓室本且のトモモレ核  
と又向也を加テ益令方丈と極モリハ

儒士何東也すと汝は入學とよきく唐士  
る櫛樟七年の才と云ひ死りてま一齒時と  
三年にて大考幅すよりゆめアアす  
を集め先づ了相のみ草ト

許六

一題は豈様の元別里也近年大根門内をとひと爲み  
禁一列もうへども禁束りきる也是師岸侯儀  
大根門と云ふとと証出づかまう西にゆく也

一紙主の年中約の定季を定む年をりとす事此の  
也段句數々とくわいに三つうち四絆と曰ト不とな  
らが秋公を感すとけして思とすと云う事ありあやと  
筆識不敵族を書と云季不向もかとせん丸ほのく  
せ守父義帝かれをもひ一時とも無傷の事たゞを漏  
路の聲りて古今集よはせや能もの丸十日撫を貫そ  
手筋をも

一回の歌の句一二二つあるがゆきの又とよき一也題  
きく、云れ叶ふぬふももが、云れ君別のいはせと人のも  
とも同因とは、きくも、云れももあとの上り下り一は  
一兵方おと娘とどうう歌ひきがする様もまわらふ、さき

のわがよ野をもてうへ  
ほうかくへ情をう

一卷數より上下二冊のまゝ、又本も収め難儀と存る  
せむは二冊の冊より、もはゞ多く稀也合ひて採集  
をもつて南よりあくどきやうの集いを加味と等へられ  
批評よびきては本稿をもとされど、集いを取き極  
一寸上下二冊あくまき集をもた二度よば後へしもと  
今がおもむかに花代いやうを櫻ほりむつとも見え  
ぬよとがいはくとすくと稀之只其角の像のまゝ下りと  
生よもとあるよと花と見よ本紙の穿鑿をうなづのる  
云能もけ園金よ、引對多きと上とよすす一教多きと云  
ゆうは一枚算算計とすむか、毎年上(そら)まゐるわ  
た年(そと)考へ新安(しんあん)と人をまへが、からぬか念すと  
一題考のうとすて深き心をよめりやうむじにあらわすと  
あらぬやうむじとせじよりの文字(字)すこぶるのたまを  
よまるとえひかじこせよとよよは寝乃着(ねのき)といひ  
へづれを身(み)にきてよまれども、はづく

と笑わむゆる其事よりてもよきよきあらゆればれ  
芭蕉庵小文庫いもとともと筋すじを引くことをも  
すよ附文庫とすてばそと武列源川芭蕉庵小文  
庫と云ふても大抵は序が付かぬので蓋すり又撰者  
芭蕉庵小文庫と云ふもじと名をいふまど人序され  
毛と題ふ紙いのしと云ふと云ふと云ふ室の持也  
又之列に表す織造あるをもあらひ是の中  
織造のこよびとよもよ計ひあらせらるる手織造の  
二本と傳ていひもとやうとあつらニ本と見方と  
さうしてかねと見てあけ名上なみじょうと云ふと十面肩じんとづけ  
そむけた而次第の付きて見方の名をまへりと  
えりす向の名あきらめわざと織造あるのあきら  
もあされど只此とあまきとひよのりと風まう袖幅そくと云  
えはまよましと先物の数うつもさくの厚さ  
ありけりよもとバ袖のよんじく幅ひきの声ハ作ことな  
寒帽さんぼうとしと袖そでを立て裏既うしりんとあらて袖  
襟えりといふゆゑに小襟こえりといふ織造の脇わきともほ  
共よく皆とあらわしとあらゆるを正題せい題だいと云ふ豆達

ともうけゆく機会を與へりては、嘸きやう。肇  
源の候恩計頃のあ報を見て伊川先生のと是事いふを  
もけじ。亦その法といもよほどといひも也。學すこ  
もしてけあらしもひもや是もとおがて魔難とま  
るるべきもれまの内能先生一代の寂りとあつて泊  
私集とせきわゆの主筋と考へてよほ達也あやむ  
文育もあらうる満ちたる足跡船乃題も、泊  
自らつまうる事も又先所傳授するは約月朝  
宗義泊業を承焉とぞおとしより反覆すと捨てて  
名付く。上度くゆる芭蕉乃号と於て泊船二字  
を被り、出でまづはりて芭船号をばのが實  
か候。芭船号稱、正仰て天皇大神と號す。是故  
モトモわよあるも孚も偽すとぞ。

一あし聖ひきと猿蓑岸儀は猿と號くを御あ  
あまわまよ似れどア聖の財と岸儀は猿のかみ  
立、名聲をとる只は代の費を改めて通やすまじ。あ猿  
蓑、船號の古今集也神かの(古來猿蓑)もああ  
櫛縫入て岸儀は猿、あ猿もとの上方集也。けさうい

トモアキセヒ名ニヤハ前ラ跡アリサヨ眼ハムシテ  
ド勧ム座ソノモニ即南のき元様義ム國トスアキ  
シテナシ前性ニモルニ惜モギテ血脉ヲ失ガムを知  
ル事ナリシハ自コニ辰也セドナシヨウタツニ流也合  
事也實、仰の恩ニ傳テ名ト成レ特不座トスアキ  
丈足セモシテ乃座トメトシミテナリ行ぬ作ヌル  
カトナカセ先所の事ナリ挾左の事ニ通ナリム  
天照大神トテモトクヒトクニムニテ御代也の内  
ニテ集モリ下との尾をキヤ知るノト原也アリト  
カナキミテ速ニ佛造をやりアリムハ之ノ事ナリ也  
モ一ノ事とトモハ末代也のあほ、佛造よがシモ  
モナヨ其事ナリトテ事ナリムカニアリム也  
只々充々トテ事ナリムカニアリム也  
佛造をやや仰まシ處甚は所ナリモニ其れを承  
承ナリモニトノモニ

一何其醫も多字の中、医も三人の時、医字は七  
多の時、医字を用へ

一朱印、起紙絃、今ハ、之を取法也。何某之印と云ひ。子

細りやみぢやよかじし御印の度合は但直印とま  
る也すと申ふ肩の印と並彫刻の法極くもあ附落葉  
さうの類こそ彫刻アカみ木判と墨して押ちこむの事トサ  
也三十二枚と云ふ文字乃様也古篆の事もさぞ千字  
文一冊より篇はくを五六枚て一字ほん山にて出バ家本  
篇よしハ村ノ字とえくとも多生肉の方をとみを連  
安一連生ハ錢よりも方よし刀の印刀立刀立刀立刀  
印刀立刀立刀のつひねとちゞめ奥尾烟銅など六  
彫刻の名す

尚流汎法

一先彫鑄造の款式よ務みてよそひのひハ多ハ先掌の式よ  
似れど尚流の用柱爲がのす後也務大ねみてよみえ  
鑄造一通の法よまば付互すよしもせみケ際の口説ひ先掌  
内奥後すて是をもがれ、鑄造のひよしせよ務む  
のあまきとを所きよびきよもあれのひの  
仕立てのとひれ

一毛筆毛よろ竹の竹系と云書を先掌の自家とみて  
的傳一草の近事ゆすよひもあらすてやひの

法どもあはれよ秘ひやかとひどかくもせせと記を  
形而と取りて傳へまへ

一 緊切字事 かに縁て他のの字と切字三つ  
入る也是初義の付字す也廣の筆おもて三  
ト二つ三つ入るも二三切三切ひらが也奥起スやうて  
トと音もちのやの口今のや々のやけと  
少しももむちやりのトとあわ

一小あらゐの方のひの 一三爲字下 二三ハ前下  
三三ハ前下四三洗ひ下 五六洗左下 は洗左上カミ  
六七乃因訛もの一文字あらひあらぎ  
山處ま花の會の處下 売マの文字取左  
三二三五切とまへ

一 わみさ一聲とも思ふもまづはけまます取左  
きどきゆきとは、さあるも大秘密也取口得  
一や文字の書いの

一 日 はめあやすよあきて山處 はやり、ひきわと  
少しがすれりと音もまちも秘ひ也  
夕處やねいじらのづ下 はやりうづ

え水と風と飄ひ東冬すて西ややすやもかべ  
ふやあれどれも一色夕景とよからぬものやと云  
す也名のてよしゆんのなす事あるぞ

ちのやのす

○口含や　是や世の様よ席ぬた様子  
○ニ切や　お前や貴は預りを門の位  
○三折や　あそどへては世すゞぐや  
○口袋や　まよや出かけよしきのあ  
○又中のやよのや　旅すてゑやは世の様排  
○六そのやよのや　白鳥や足を貞とめほの綱  
○七すきぬ　じぎみな甲の下ぬまづくと  
ちのかねやうのす

○糸のや　被はほや面櫻のすもと糸  
○四つぢや　を拂てゆくやまよらう柳  
○も　秋ももやげづる年月の秋  
○よど生すや、糸のやと同音也　口含のや　糸のや  
さざれ安一

あつこじやく浦けてクさみ

ちりとやハラルのやまと そ浦と口食ひすすて  
口食のやを船のや 烟や林月やふ葉はれまくらす  
て口食ひすすて お簾やかふ 頂ややひく 葛城や  
ちるけ敷き口食のやを 口食や底やのや  
びせも巻き下とすすむらゆどぐ

ちりとや浦けてすみれともえ  
勝とけや轟脛れで海原 各不乃や  
て下と秋とのまほあいとある様式なり

ちのやれ内才に轟かうびのや 二毛モカニ敷のや  
と云やとシテアヒシムニモセモ もやさりん 富  
かほ 天やあい 梅やまぬし 皆のう敷也

うちもや穂やの鷺の刈みー 犬がく紫

疑い紗や 一里ハ皆だりわね子縫や  
おひごのや 莲草すきうがは勢ひ和伎  
おひ紗や こあゆえみは実まの寛於じや  
のよ 四行てふ  
星雲乃園とうすすめやのす  
やまあも いきさきまやあし続の松並

とあるのへいと相のむをもて連保の旨令乃判  
ヨアリトヤモリ也よそづやはくにハジヤヌモセキナラ  
方々ナシのやちまとも罷ハキ教経古用於事  
○わざやとぞもるや文をもくへりとく文也  
多一わざやとぞもるや二とをもく文也乃石龜句会  
乃骨大根ノヒツタモとぞ

生女を抱てぬるやうねり

大相撲のよだれ牛乃風

卷之六

是の事あらずやかに太持す室ぬれ別切字と  
を込む有て自由なるゆゑも不お無の事と至て爲る

二十一

九月九日重陽  
乃在

1  
有乃國も今や是れども

津ぬおもてまきぬのれの方へがよそくゆべあまを  
へ

神事をやいのん佛乃うらうと  
あ行たる吹きとて汗腺煎汁  
事あら、後あでけれは二家切あるも一字  
粋といふや

二字切

面内一言やナリんをのる  
子たよ至教営ぬ凡じ

二字切

神事をやあヨリノ輪をも

まあれやくよこの字わがれにまよひけり字  
ゆきやあこが十日も爲事まばいくも多也  
年みどよ爲事まニ字切有

二字切

赤ひせき七章仰産ハニモノ萬

大四一乃わゆ

あれうとちの日みぐく王は

写毛音大口一毛いきとれ大口一毛あもと  
事まくひよせ師おけの脚やされあたるが

と吉有て下を度てへあたるもあ切入口一の仕様  
おひきまされ候が事とどくうもてせざる宿より一生焉じ  
ミシシナリの事とぞアドリテ用がりよんのモモテ西  
やアシナリトモアタカナキナキナキナキナキナキナキ  
切内々ナリ

一左幸左寔左敷左ホノ角とくや度也も  
上ものとよがきとどもが見候ともとくれりども  
人わくそよがたをはせ一枚かたとどれれく

古實の勺

龍塞 隅吉をもて祝吉の事

畠

篇突 山科の事病之あや通の事

許六

行玄承コガク 天子も三事の解を法ほす時檀紙よ包  
小角よすみ川のゆくに祝吉の事よ付某きとせ算く  
さやや萬圓田侍トハ波多是吉安也 山科の御よス病  
三乗一為ニ來きどきの事即解所の事<sup>キヨテ</sup>もあいかい友の持  
来事の事類ニ來ニ來があざやこの行えを即領の事得  
トす

古井とれ松

元序七回忌 茅の天井 流化無り

荷物の多岐ハ仙人アリ也ノ耶

季由

内一監送主もあ鄙乎と考画り

さき乃小瓶や何を船もテ

许六

十月廿九日付ハ十月初ト

汝村

拾遺集ノルもあひあきゞど又のまよのびぬけ也セ  
あひ落葉もさうぞれやほき小瓶や何ニモセヤ高  
貴之姫の奇之母を敵あせつめ下よりけ言てよび逃  
くもと、雪は暮月の夜もとよやうが十月三十  
日もあやけふ宿屋でとまもあ附乃添セム  
あ致のことと

小毛口や友行吉の不二月

季由

が死は亡く、亡くましり

许六

正月や先づきよわあ~送

朱廻

深秋の葉を下すまもむほのうよみまよ上よおぢよ  
やを詠やうわとく、御葉がする深秋源内はく方(西)の前  
屏風のかげよれきとひの半ねの御よ、壁の屏風  
まわくも庭出立とく、周沙波木枕又絶縁は清美翁  
がけとくと云月の又文字もりあく

に五月乃う波さ波やほとす  
せきかねあまのとてまよ月と月と波のとて  
月とう波とう月と波と云ふと興ちもす

世話

はとときあ蚕乃四月や叔の五月

塗

お夢や小の小町も衣繫る

蔓

名月やゆかね凡そ年乃や

櫻

翁よまくとじみとばしきは衣の先ぞはせうあ  
奈陽れと云歌詠は一翁の半角集のまなぐ  
人乃経け核共もひくわからて

紙子毛テ川アヤモト龍田下

詩

或人詠云左那モと云花の匂也」と云是能詠寺  
ぬ今通大阿乃吉野人ノんゆを浦ノ中絶じと  
立田告幻流わゆくと残す立田のかけ合をま  
懶る季の辺まで、難とする底す残すゆも

入に毛モ柳モ引ほる季御不見大橋と  
仇やれむ乃匂きと云花ハ柳ノ立田柳乃不  
され、庭みこなすもハ柳懶む

二世の匂

ご去 羽は枝の節より下からちのを  
羽は枝をとどけるもさまで扇の一宇よ眼へ  
視を 収き大よ圓あてまくれの匂 許六

とを來来の匂

果ま 南天すあるふきすよ跡

李

十年のなげりをくわへ

画讚

梅月ノリ翁

桔梗や粉蝶ぢりりのあと

片表ノ清 二

みよやいふらうて秋て能む  
麗空冷ける處のゆづくれ

李

景曲の匂

あれや麦の中ひみのを

李

吟詠云京氣のうせ方容易すもるがゆかのうと本尊  
之連す京曲といつての京通すアフニ一代一尊、  
ひとと京氣の匂ゆまよまよあはくやくやん詠詠を  
ま前後はまだ典ふ京氣の匂、壁よるー匂の曲が

て、かづきあつて、そりをまもる事  
曲のうは、伏せじと、塵を、ひくとも、  
乃ゑ口と、拂へて、唇も、口も、あく、  
見様、が、屬しと、空氣も、みすと、寂き、ひき、  
まれて、の字は、の細代、本是、つるや、がのえ  
一題の、すねは、ひづけ、せき、と、尋て、まく、  
えき、待人、と、つて、尋て、まく、と、いふ、  
て、待人、といふ、と、拂へ、尋ね、また、柳、尋、と、ゆき、  
あたは、あき、乍ら、だた、ひと、と、大ふを、  
まとが、やうれ、故實、と、も、ぬ、人、に、まつ、の、も、  
一切、まうみ、縫約、の、ちい、由、と、付、接、縫、ぬ、（す、ま、多、別、  
み、む、よ、ひ、ま、き、れ、の、ゆ、也、）付、接、縫、く、へ、

卷之三

やくもくと皆すととやまきよは胸とくは速ては  
あは櫻花、事より食すとす日つの中よもはあひ道をさ  
くわと絆するもほは生所の夕、七八必え食すと食  
旅もくられ食ねと忙よもぎるよけ旅を道うとてもみ  
にわすと事よも道をさとせし事す乃様よ  
てあきらへてゆの事よもんたゞ、往種つは十  
又よもなづかぬと旅へとまじ仰む

脇のよゑもがのをまとつむとする勧公齋  
よゆりるよがの三体を送て絆の名と行よも  
一字すとめあてよどちをと拂つめつ乃はゆくも  
かひどうみ対付拾へ付大少の物をとまつも南極  
用持後し義もの季三月よ處るわあは脇の夕とく  
と定むのまこと

一月このよゑ一旅着の傷正く上まの入るとおは計三三義の  
赤絆のよくうれい付と上まのを傳といとあも計三  
立とおてもちよも嫌いあれが一内旅正く一月の合  
まふをまかねかこよむ極る先所去世の附書六章と  
梅うもや風むとまことらりを

太と你被アトキミ在 牧る  
陽モヨサ劍の牛乃乾ヤケテ

翁

自雪自譲と辰村アシタニヒタニ己の墨直詩稿  
乃ナコトノ

下詔の憲ヨ一筋アリテ解妙てと云ひ乍ニのすも  
とほく(き)ムルモの一子をねまき(け)オニの貴わ(定  
ク)一毛毛(毛)娘(娘)未(未)候(候)の顯(顯)モ(け)松(松)

五月(五)月(月)半(半)生(生)う(う)と(と)ど(ど)もの(の)は(は)ち(ち)の(の)称(称)と(と)め(め)  
判(判)た(た)ま(ま)う(う)と(と)そ(そ)う(う)て(て)傍(傍)

一平(平)易(易)の(の)寂(寂)カニ(ニ)よ(よ)る(る)や(や)せ(せ)ぬ(ぬ)と(と)う(う)知(知)れ(れ)ど(れ)  
ウタ(タ)シ(シ)も(も)流(流)キ(キ)不(不)登(登)波(波)ト(ト)先(先)波(波)の(の)ゆ(ゆ)シ(シ)テ  
ガ(ガ)有(有)ア(ア)キ(キ)ぐ(ぐ)や(や)ト(ト)も(も)え(え)ア(ア)シ(シ)ヌ(ヌ)シ(シ)ヌ(ヌ)シ(シ)ヌ(ヌ)

シ(シ)ウ(ウ)ト(ト)シ(シ)テ(テ)笑(笑)ヨ(ヨ)ケ(ケ)テ(テ)モ(モ)あ(あ)レ(レ)

一モ(モ)あ(あ)カ(カ)ト(ト)祝(祝)ヒ(ヒ)シ(シ)ム(ム)ア(ア)ハ(ハ)シ(シ)ム(ム)キ(キ)

き

里(里)素(素)ト(ト)イ(イ)モ(モ)ツ(ツ)ド(ド)シ(シ)ム(ム)ト(ト)メ(メ)ス(ス)テ(テ) 先(先)キ(キ)ム(ム)

一モ(モ)あ(あ)カ(カ)ト(ト)祝(祝)ヒ(ヒ)シ(シ)ム(ム)ア(ア)ハ(ハ)シ(シ)ム(ム)キ(キ)

馬(馬)付(付)の(の)こ(こ)テ(テ)さ(さ)べ(べ)ー(ー)さ(さ)ね(ね)の(の)セ(セ) ノ

モ(モ)あ(あ)カ(カ)ト(ト)祝(祝)ヒ(ヒ)シ(シ)ム(ム)ア(ア)ハ(ハ)シ(シ)ム(ム)キ(キ)

四

五

一後どやが、とくまなつてもゐるゝやうの二事  
ぞもとまつてもゐるゝやうにすこしもあ  
てよあわゆゑをせじや使とけしゆゑを上よ  
あれ、草ともいふてかといひふて  
いはれんが、まぢかまぢかをも尋ね  
来船のう那、船と云ひてゐるゝもも  
う貨のう船、口てよいかと云ふてゐる  
とおひよきをもむのねはひよひよ  
さうたゞへおとせんとおほせんとくも風ふふたのお處を  
お不波一川を度て、もみのねはあゝ(三字)お船  
ゆと通ふてゆる上(ひがひ下)をもと連ぶゆ  
て上(ひがひ)をもと連ぶゆる上(ひがひ下)をもと連ぶゆ  
る風也あれば、ゆかひゆかひゆかひゆかひゆ  
り、まもゆかひゆかひゆかひゆかひゆかひゆ

一匁め 一匁め すくはのまへるひ すくはのまへる  
匁のまへる也 近年て あた匁め ひとすくはのまへる能  
造元様よ すくはのまへる が すくはのまへる が 献之古方

卷之三

きはにあらわらや。秀逸して肝てよをもひと  
草ト素アレ飛とすもあらや。

一座は懷持うるよ欣と敵までニシのやまと庭は  
ほれこみ下を上をもむかへば決と待すや。白  
ゆもつゝと見て出どる。うきのほひてすも  
せじらやせじと名むすゆかよがねと出  
て懐持うせむまいたの能活もやおりりすすり  
被あくよひ神わくもとをもく素ざる物もあ  
はるのびはくもじづきあくゆくとあくじ  
はれまよせざれからぬるかれとせよと幸まよて  
人内葉。やよやうおけとまよの也。

一日の夜すれなくちうた。あやハナのうて  
すみきと一たの時まよ体てせむ。十ニとて  
月死経ふるむるに。春日は。懷持う因化  
へすれとかつてつほと。懷持の花は。春返つ春と  
うはもつては。奥ニヤハ。大才お言う例也。す神は  
のめぢりもじ。勝利。勝ち。ゆの鬱之花を採  
と。手作をもと。南の風。ね丹。老ひひの花

半様にまほのま、様より娘ス牡丹うてもか一章  
宋玉花は素娥の夫名と何され、もよ様見る  
やうもくそ花のう様たゞ、先より様けす事あん京の  
生まれ度のゆゑに花はばと生時やと生ききあ  
様裏がそひ、あらのまよ様よりもと人漫つて正花  
よ様もくそも様れ正花神をまよ事なれ侍  
主也別事まじる不審とからせ程と云て乞奉ト  
よしもと様(正)雖すと云い先より入る事  
を正門の元史事よりすてを乞所いせぬうそ  
御宿あり、又神乐掌とちせりきまよ箇人神乐掌  
と筋(正)まよ御宿は事承と用を事する神乐掌とし  
ナリバ一筋(正)深き事と云ふと事うその事情  
と云ふ事、事承は事承して事承は事承の事情  
の事承す、神乐掌あるハ神乐掌と云ひてく事  
ト云ひてく事承と云ひてく事承と云ひてく事  
き

一月の夕べに事の事よりもう少しも寝ぬよ  
月はゆく回まわれ御事付ふかさうの氣うとえ

まほりとせまうの夢を早月夜枯つて月より北ス源  
川集佛塔より有りとてもあら夢歌の月よせもゆふ有り  
（まゐるは月が陰ほけやくみ日めのあらき月と月よと  
アリて秋とせせし八月とも月歌とむまも食く月歌葉  
飢引の歌）完ひすゆかくは月歌とむまも食く月歌葉  
冬とすの無常せまくすまくも月歌の陽ふる有  
りせまされ、アリてさう佛よまくも無事を曉え  
萬の月よ空ハル、アリて無事と無便也月ハ空モナ  
キムカツル（アリて）月ハ空モアリモセアリ月ハ空モ  
セアリトセアリト十六日モセアリモセアリ月ハ空モ  
アリ空モアリモセアリ六日モ限はセハ生能  
一泊宿多きのす、ゆえも千変万化とつたつも  
不思議なつねれんあくへにけどもく

假のう  
はう

あ  
花ア  
かくきやうわきぬ

月氣の奥見と申され  
て又遠て

あ  
田  
中  
久  
一  
九  
三

ゆきふ、ハ、宿、そ、わ、人、も、お、や、く、

毎度のけく惜り喰ある

京きりと  
口傳

お魚魚乃ト桃井玉子と氣下風

汝さへあ星川の桔

一萬付せ万付御禮ハづねどもとほくとをも  
万付たすすくとまをされしものきとすニ  
匂ふる入てもかかはれども萬付前す聲と不入一も  
御ノ御ノ御ノ御ノ御ノ御ノ御ノ御ノ御ノ御  
在ふ御御御御御御御御御御御御御御御御御  
まえども付とむすをは御御御御御御御御御  
のうよのがよがれがともじくとひらめく  
さうすまうすまうすまうすまうすまう

一萬のすと考う多傷と記せらば云ま青は桜のす  
つまうすまうすまうすまうすまうすまうすま  
のう桜と離と不後山高は桜のすと白山全  
て又よもれも桜のすと花弦のすと白山全  
てまた心と都すなりでお仮とあははの川あ  
まよおれの夜としむとがととすととま

奇乃イニ金カト

衣あゆ見も金縫を當付近の祠と云ふとき、衣  
領城文義事と云祠たゞて、用ひ一あら附  
うき立つて、一祭りに於ける事の方半を  
人情とて、いまと例の祠大方半を  
瓦引内をあらみ神の奉主と生所やれ  
より又晋代よりアリ

わざとおむす男乃まくれてと云ふ志の祠一  
字は、金ノ瑞とて立のちも瓦拂半を元日  
禁物格相承る爲めと云ふ在乃は、此年能出と云  
の祠と称するを今胸中せざるをあまくも想別去  
也も國も様式とて、神心の祠もと、傍見立處を  
大慶石坊主所会計といふ處は、既往の御心の事か  
甚多矣と云ふが、其時ハ幕が下も未季より後  
意別りづくの差合をあますてよき付向半を聞  
差合の、御方あわや口付

一あじしきときの御内をさかへて、やけに壁上  
をまぐれ、御前と云ひ缺角するあじしきときの

作もすゑを無事あくまき歎向稀なるを仰せ  
ありしと付えども大祕すれどあるの内にう  
やくはるよゆけむる所の医事と云ひ皆く内  
事の主家のある所の院事と云ひ能くか  
て心い柳よきなをがもたゞ精をときの教説、

精を日、ナガム、ヒトコト上りする

精を日も浴てじすと付と浴一キミハ朝  
ノキ取向えあくまきと云ひ

精を日も浴てじすと付と浴一キミハ朝

ナリ小文庫より先附の句

そきわよ柳乃さりふ志を下けぬあま  
そきて也よすぼりけん是首まれき可也

そきわよ柳と自筆の経文より、連文院のよ  
そ上行わよきわよ柳のさりやて二句からうすをき

やよきわよ柳と自筆の経文より、連文院のよ  
夜う門里の連文院より引れて、夜う門里とづ

きてよけの教へるふりをされ候事とぞ  
一色あの裏門がちくやうに傍よりがくわらとせど  
お仕已おとしがまくらへた顔面、白い絹シルクをあわしてゐる  
及書物しょもはよほとあけたりのつゝと定ひてゐる  
まちうらゆる監ケンの連行リエンキョウは其文役ヒツモンエイも  
あげて例シテあげの花大秘カハタヒす也

一祝シラフ之乃能活ノウハツ禁キン忌キの包ハグみミがさる也近アラタニ  
因ウチ見化ミハシマ獄ヤクの門モウはやくあまヤマツチの能ノウ  
活ハツよも着シマツのまとせぬシマツ又アリ

一他門の後アフタ意イ蕉翁シヤウワは蟲ムカシ上ウ能活ノウハツよと云ハシメ  
先セン事モノはれて云ハシメ翁シヤウワの年イニシとくねむる多タチ  
一能活ノウハツもあく老翁シヤウワ蟲ムカシをこれとす無ナシか  
からめ回アラタニとく稀ハラハラ他タチついて來アリきえ師シマツ一生シヨウの譽シメ  
おは能活ノウハツの上ウ極シキ事モノ仰アガマ老翁シヤウワ能活ノウハツと心ハラハラ究ハラハラ  
らぬハナシ人生能活ノウハツもとだつて立ち初ハラハラてつゝとあ  
予シテ多タチ年能活ノウハツすと云ハシメあく老翁シヤウワは薩サツ人ジン  
もととくいはよへとシテあらわす

一萬葉ミツバチもつづきのうとシテも前マサニのあきうと

ひまくとあたられまくうてかよ細ほじ原  
陽とまくまでにかへり前をうけむ前ほりゆ  
うすやうすげばはよん鐵砲は足てせ火炮の  
化をのこよし近年正福寺扁額本邦委ねてを  
ノレ初から遠りゆきとえくとせんへそ人のおと  
ちもえまくと身内とじは行しとえり抜痛三  
を集め腰をかえまくと絆きがはされと持て  
医と生所一生の怨みとてせゆくゆせそ人の眼  
もぐれぬもぐれぬと尋ねられ教と一生あほ  
果とくわらじの連あ代の産くちびたの地  
果とくわらじの連あ代の産くちびたの地  
くうくはつやは音鐵砲とてまくよおとすむよお  
は後裏岸後赤川あらともお城のこゝで先所  
内空氣とあらざき百事のはを蓋ほの血脉  
とあらざき鐵砲あらともあはき一氣を世方さま  
ひまくとものとほ首目のまくとて大切をすと  
今の大活のあ寄島よもよおれよ家義乃は代まで

百韻花をかみつ字の附はせりやのまへ  
西一つ執斧と斧刀をもて臺前せらも元もそひ  
ゆつよねまゝくも由生所よれを能活、萬付えよの  
時とはは沙牙よとゆじき薙流血脉のつゝ三  
よよたこど柳くらきす所、は化の日と云々改させぬ  
狹み能活一人役あらわへよされひにとちる能  
色直流直指の能活ゆれせど彼二より能活さん  
人亦あらずすと云々教義の方の角すと云々の能  
乃よをを二三より云々生能活はよとせりうご  
ホリ能活もまれことをゆきとらひゆ

お尋ねせぬとまのがくよとえす者前まほん切よ門を  
トキ風と一も取れど解よましとつゝと傳  
ふへばはくのむかははとすと、がまよしある  
御の度へ傍ひまくあたまを含ま

人妻の汗よへりと涼やかにあらわす  
涼たれ氣の母へりひきと葉ふみ天草の  
まちあらひ戸はまへる事無くひづ  
角もかとせんあつてぬとせんすれ

トハ許を云は候事無邪也初第身  
わば一字より云へばとやせん爲起て云候の力  
モキモキもやつて云ふ事もほんの風致あわとひて  
事もくも事と云下の事もきよまれてすは候の中  
おほどの角にスル角<sup>ヤウジ</sup>一トノアシモクニセガ  
例の骨をくらべと骨色<sup>コロ</sup>アリケン一白され<sup>ハ</sup>一庄もと  
アリムヤモクモクモ軸もまく胸中とさざす今とま  
こまきわ

一とて懐紙を取るのせむ也一順へて懐紙を取て西  
の左よ向とひまわら一順取て落葉の写とあわせ懐紙  
を書り又書かまひて内にまた取紙を重ねて落葉を定め  
人へ見せ、序文を書く。懐紙もあわせてや寄り、枯木漏  
風は静かすと尋ねば、かゝりも難波あくび、ごくも  
書く。行年一百二十九歳也。あひは時ほ通じての  
達へうれど前の方をさがして一乃能とよゆるを擧  
のじゆゑよ。墨アスロよ候くまへ

二尺の丈身守法  
アヒルの毛皮を身に着け  
製造の方法も用ひ  
アヒルの毛皮を身に着け

一弓十萬韻の卷別と云はるを據へてある多く、十萬韻  
也。半韻、弓韻のよきの匂氣も此年、甲子年と云ふ事  
も又半韻の例也。而して弓韻二分されば、或は  
一弓のものも、一つの弓は先附やされりゆゑに、或は  
弓韻を一弓にすむ事無ひ。只一弓の差を考むがで  
今一つもつづらぬ半韻を以て難いからて、類裏  
也。若し弓氷庫等の能谱、何れもその中より、弓  
半韻、弓冰庫の類うつゆむ。弓氷庫と呼  
ふるも類くまゝともうやか。

一弓式今垂るたれ、一弓トニ弓能谱すらの内と今  
一弓にじ秋山ね丸囲あ

一又弓橋一弓すられ、弓氷葉ざる弓韻花二弓  
の用代きやう例如、一弓能谱す橋綱橋貝の類、  
さりともわざとめて今一弓をうけず、其形を全  
のうへ取式と葉ざる者とべ  
一弓橋み空のすやうすらじあ能谱の空事といふ  
事よりの様式ナリ。うづり五源氏後夜の空管、  
本音おはなし生拂一弦と云ふ人より傳わられ

やみぢまやくすのをもれ當流の様式をもぶ  
きばり腰痛すた後し序記賊説解蔵辞を  
かづき別ほじまふ文書ハ字法にて怪る事有  
ど假名あらまののちに後し本山ニ柳ノ腰痛隨  
意と腰痛記と云ふ文を天龍腰痛記の賊がぞ  
何の地と記す事あらんや又乃勢王元之竹  
橋記をあて、只一筋を恩恵なく坂地の記と名有  
ト而してそくから是日中のことを也ニ柳ノの  
事やありとある。

一因字のす詣る連體たゆうと、上ノタシテ  
あひて下ノタシテ、右ノタシテ連体で然ドキ詣る  
玉置はす乃様、あひて因字をゆゑとこれを連體  
とすときあるべくも向は玉置はす乃様とス  
て因字あるべくも

おけらを毛を足ひみづへ

老鷹ひさかくと考す様

陽<sup>アキ</sup>ね様ぬふまくの愛

許六

畫

教殊粒とよびうと御教系

本尊

朱廻

三事あまくわかふ盡錄  
古事記上大原のく版のも  
は立毛をもてわる處と  
大の急被てあくく所差す  
れとふ恐力砂の所を  
是難のゆくよづれ是號大  
勝トヨハルタケ  
さもくに本持者と云ふ事傳  
めと傳と力本魚師シロ  
脇アキラカよ射乃付アキラカはふたを  
萬勺ヤシナをあてゝ是私シロが事  
後退アツメテ乃まアシテえひじ十二  
やぐて可解アシテのには終アシテ  
れらをよさむおもてをもれ  
禪アマリと自便アシテの仕事アシテのせ女  
恵アシテをよそと持アシテしも極アシテの下  
若粥ヤシナもよな病アシテいのちも  
御鑑アシテみてよろとよせよは大吉

寺町の異名をとあ  
鬼胡桃をびきゆの神尼  
猿三吉ノ子有乃月  
村曲で能手さくらん<sup>カララツボ</sup>  
鬼の處うぢる本名の言を傳  
おてゆきを守り教よまし業をて  
あははも苦心とお詠やう  
はちきと寂のすくき、音とも  
辞帳の中みゆのと廣さく  
あはは食傷一もと玄界あ  
あは利刀もかは萬萬  
あはもどく朝の小豆粥  
重ねちきと二井の弓  
日の豆よふをむのさりもと  
ぬるもる金のほりうなじを  
せゆきほけう力鬼作た  
ツシテ大吹せうく  
満月のえますをふ絶の声

伊藤の海で衣食年を  
船りでね草山へ行つたと  
兄が喫ひも草生の宿  
肱杖のふもともさくぬわらし  
どろきと墨の純毛の下  
ひくと桺の角の絹のび  
裸でそは絹綿乃軸  
あくまで糸一筋引けて  
移投してゐる所のを至  
大きがふあみ松島にて海舟  
甯ち帰つてからも  
毛扇と扇子と引ち  
扇の柄とやく扇  
はすと手市日のひの扇の柄の幅  
ほどの扇の柄の幅  
固い壁もへばまくのうえ  
かまく花のものとおひらは

九六由コ巴九六由コ巴九六由コ巴九六由

さり乃り減る程難矣況  
密まよ作わ付く阿男づわ  
只一んす。か春つも、も  
えぞびり柳(柳)とてれども  
が次おまが登の日承た  
む豈も近はくやみ舎をね  
元であとものひすりま  
なぬまじれをよウタ奈  
秀里もさざれどれの身よ入  
きよのじり。お六家の船  
中乃れ見てまうる金羽龜  
鶴は、はく烟のうちわ  
あやめ青様の草トみのあ  
波ノ人の付 経繩のと  
ち縫乃経。龜のうがつ  
覺位牌にくまひをす  
あす。枝の拂ひをねのれ

己巳年正月六日正午由正午正月六日正午鑄錢籠

在食の馬と下よえも  
け度ハ母の如い乃射山  
玉入るも殊乃歎可  
飲るも懸いのをもふ思は  
けありもケトヤムナ  
月暮りをかたむカモ  
すいあさの春風の  
元が沐取く射乃行  
門はもあてモ干シ物の私  
伊ちやう女中のまほ出事無  
まふ下向で二つち向  
歌づ舞のませふ、も更  
一セ 梶キの皿の歌  
肩固く夜暮きもせかわ松  
引はれで早大和歌  
ヨロシハ幕よハノの日よんせ  
ハツの日さすよ下の心内  
緑扇の手よ似食ぬお粉をそ

十念すすめば景の所すら  
名月のあよハきとさいざ山  
夜中啼てはめうれわ  
脇身手をひきるるまく松の内  
松生へゆく指の下事  
る盡一夜も名ぬ夜よ  
大肆の用でいまれ共に  
町より参の入日派ひて  
株と縁との音ひせりま  
林窓で音ア集音の音の音  
岡ア汗く風の馬馬  
角毛花をもむてお咲ニ草  
岸火のよすりゆる陽や  
滑船乃喉と圓ももふそ  
机の氣乃匂とさく愛薦  
かわよとれてくふじ家元  
えみ乃あわの妻ゆくれ  
ととがと大雄の極の絶傳

あり行は斯くし  
ニシカ夜の福で雪の太白是  
牧の六月みに安月  
以上乃方よりわらの城とて  
大坂守義で二十三日目  
もよて今を娘の様である  
御前は之と計を計り、  
考査切じゆ連とす

六 五 三 二 一

# つて至る事無

